

ぼくたちの夏

2009（平成21）年8月9日、とつ然のごう雨にみまわれ、ぼくたちの町はいっしゅんにして何もかもがうばわれてしまいました。土砂であふれた道路、こわれた家の前に立ちつくす人、たくさんの方のなみだ、多くの悲しい姿がありました。

ぼくの所属する佐用高校野球部は、大切な秋の県大会に向けて練習をしなければいけないのですが、もう練習どころではありません。いても立ってもいられないのです。あくる日、先生や主将の呼びかけで、みんなで佐用の町にボランティアに行くことにしました。



「うっ、こんなにひどいとは……。」

あまりの悲さんさに、はじめは声も出ませんでした。

「とにかく、できることから始めよう。」

ぼくたちは、みんなの役に立ちたい一心で、家の中のどろや土砂をのけたり、水につかたたたみや家財を運び出したりしました。みんな必死です。どんなにたいへんな作業もつらいとは思いませんでした。

そんなぼくたちに、ひ害で苦しんでいる町の人たちは、何度も何度も頭を下げて、

「ありがとう。お兄ちゃんたち。」

と、温かく声をかけてくださいました。

「ぼくたちより何倍もつらい思いをしているはずなのに……。」

かえって元気をもらえたような気分になりました。

そんなボランティアに明け暮れる日々が夏休み中続きました。

ようやく町も少しずつ落ち着き始め、ぼくたちも大会に向けた練習を再開しました。しかし、秋の県大会は1回戦で敗れ去りました。水害後のボランティア活動で満足な練習ができなかったことを後かいはありませんでしたが、試合に負けたくやしきは強く、帰りのバスの中はちんもくが続きました。

高校3年生、最後の夏がやってきました。町の復興とともに、ぼくたち野球部も、甲子園をめざして練習にはげむことができるまでになりました。しかし、えん天下の練習は厳しく、もうやめたいと思うこともたびたびありました。



ある日、練習で心も体もつかれきってしまったぼくたちは、下を向いたまま帰っていました。商店街を通りかかったとき、

「お兄ちゃんたち、わたしたちの分までがんばってな。」

「がんばれ、野球部。応えんしてるで。」

と、町の人たちの温かい声があちこちから聞こえてきました。ぼくたちは、胸にじんときるものを感じました。

「よっ。」

あくる日からは、あれだけ苦しいと思っていた練習がなんだか楽しくさえ感じられました。みんなで声をかけ合いながら、プレーできる喜びを感じながら白球を追いかけました。

夏の県大会が始まりました。ぼくたちにとっては最後の大会です。

試合前、主将がみんなに熱く語りかけました。

「ボランティアのときも地元の人から応えんされ、はげまされた。今度はぼくたちが少しでも町の人のはげみになるような試合をしよう。」

全員で必勝をちかい合いました。そして、チームは、順調に勝ち進み、ベスト16になりました。町の人にも大喜びです。しかし、ベスト8まであと一歩のところまで、ぼくたちの夏はついに終わりました。

数日後、野球部のかんとくに1本の電話が届きました。ぼくたちの夏は終わっていなかったのです。甲子園大会の開会式に先導役として、ぼくたち野球部の主将が選ばれたのです。ぼくたちは、飛びはねて喜びました。どんな形であれ、夢の甲子園に行けるのです。

開会式当日、いよいよ入場行進です。ぼくたち野球部員は、4万人の大観衆とともにスタンドから声えんを送りました。

主将が胸を張って堂々と歩いています。主将の行進に合わせてぼくたちも力いっぱい手びょうしをしました。ぼくたちの胸に熱いものがこみ上げてきました。

甲子園球場をうめつくした観客からの温かいはく手が、いつまでも鳴りやみませんでした。

（「佐用町立佐用小学校 道徳資料集」より）



佐用高校の卒業式間近、佐用の町では、商店街のあちらこちらに、佐用高校の生徒への感謝のメッセージがかかげられました。

